

生駒の神話の謎・疑問を解く鍵（試論）

＜生駒の神話（ナガスネヒコ物語）の真意＞

（生駒の神話は里山誕生の過程を反映したもの）

（1）邪馬台国（2～3世紀）が存在したのは弥生時代（紀元前数世紀から紀元後3世紀）の後半です。弥生時代には、海の向こうから波状的に人々が渡来して金属器（青銅器・鉄器）と本格的な水田耕作をもたらしました。かれらは、鉄器も使用して「**1次自然＝原生林（常緑広葉樹林＝照葉樹林）**」を「**切り開き＝破壊し**」水田をつくりました。その過程で、原生林は「**2次自然林**（人の手が加えられることで維持される森林／自然と人間が共存・調和した森林）＝**雑木林（落葉広葉樹林）**」に生まれ変わり、それと水田の間にはため池・水路・畦などがつくられました。こうして、「雑木林」・「水田」・「その間のため池・水路・畦など」という3つの要素からなる「**2次自然＝里山（自然と人間が共存・調和した時間と空間）**」が誕生していきました。

（2）里山が生まれる契機となったのが、先住民（縄文人＝狩猟採集中心）と渡来人（弥生人＝水田耕作中心）との出会いでした。里山が生まれる過程で両者はどのような関係状態にあったのでしょうか。当初は両者は住み分け（先住民は狩猟採集のため高台に、渡来人は水田耕作のために低地に）、やがて融合していったと考えられます。**両者は、部分的には争いもあったかもしれませんが、下の資料にも記されているように、概ね、平和的に共存・融合していったのです。**

①「縄文・弥生人が共存し、両方の文化を取り入れて共生の祭祀のシンボルとして銅鐸が生まれた」

（クリックしてください→）<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/17.pdf>

②「縄文から弥生への移行は平和的な移行」

（クリックしてください→）<http://pdffile.cocolog-nifty.com/blog/files/18.pdf>

（3）**里山誕生の過程は、「負けるが勝ち」「戦わずして勝つ」ことといえます。**つまり、1次自然は「破壊された＝負けた」ことで、または、「破壊を受け入れ＝戦わずし」て、**より多様性豊かな「2次自然＝里山」として再生（自己成長）**できる契機を獲得できました。

○このことを映像化したのが、アニメ映画『もののけ姫』です。

・その中の「いったん死んだ（殺された）もり（1次自然）が里山（2次自然）として復活・再生する場面」が、これ<<http://shiryoufiles.up.seesaa.net/image/E38282E381AEE381AEE38191E5A7AB.swf>（クリックしてください）>です。

・なお、エボシ御前（よそからやって来て1次自然を破壊する者）※と敵対するサン（1次自然に生きる少女）と共に行動するアシタカ〔ヒコ〕（先住民一族の長となるべき少年）はナガスネヒコがモデルといわれています（ちなみに、『千と千尋の神隠し』のハク（ニギハヤミコハクヌシ）はニギハヤヒノミコトをモデルにしているといわれています）。

※エボシ御前：<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/2013/05/post-b611.html>（クリックしてください）

（4）弥生時代（長髓彦や磐余彦尊も活躍した時代）は、いわば、先住民が渡来人と平和的に共存・融合してより

豊かになっていった時代でした。つまり、先住民が渡来人に「国譲り」をした時代といえます。「**国譲り**」の過程は、「**負けて=譲って**」 **勝つ**（豊かになる）、「**戦わずして=相手を受け入れることで**」 **勝つ**（豊かになる）ことといえます。

（5）長髓彦や磐余彦尊が活躍した時代には **2つの矛盾**（「**人間**」と「**自然**」／「**先住民（縄文人）**」＜長髓彦が体現＞と「**渡来人（弥生人）**」＜饒速日命・磐余彦尊が体現＞）がそれぞれ激突し、意識する・しないにかかわらず必死で矛盾の解決策を探り、それが見つけ出されていきました。（1）～（4）の青太字で示したことがそれです。それが、長髓彦や磐余彦尊の活躍の背景であり、生駒の神話に反映されており、生駒の神話の謎・疑問を解く鍵ではないでしょうか。

＜この文書は、「**生駒の神話**」（下記 URL をクリック）に掲載されているものです。＞
<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>